

ミーマーンサー学派の聖典解釈学における lingaの機能について

吉水清孝

はじめに

ミーマーンサー学派は、ヴェーダ聖典の複雑な祭式規定の統一的把握を目指して成立した学派であり、他のインド哲学諸学派とは異って、もともと存在論や認識論を論ずることなく、また解脱への志向をもたなかった。この学派の根本典籍であるミーマーンサー・スートラ（略号MS）や、シャバラ・スヴァーミン（Śabarasmīn 五世紀）による現存最古の註釈（*Bhāṣya* 略号SBh）は、全体的には、極めて煩瑣な祭式解釈学に終始していると言っても過言ではな

い。但し、ミーマーンサー学派は、祭式を規定したヴェーダ聖典を構成する言語のもつ機能については、成立当初より重大な関心を寄せていた。

七世紀になると、バラモン哲学諸学派の通念と鋭く対立する仏教、特にディグナーガ系統の教説に刺激されて、クマリーラ（Kumārila）とプラバーカラ（Prabhakara）の二人が輩出し、インド哲学共通の哲学的問題についても、各々独自の学説を確立した。その後、両者の系統は、互いに論争を交しつつ、各々の学説を整備していったが、インドに於ける仏教の滅亡後は、ヴェーダーンタ学派やニヤーヤ学

派に見られたような新しく独創的な展開は、ミーマーンサー学派には起らなかった。その代り、数多くの網要書が著され、哲学的諸問題の定説や、ヴェーダ聖典の解釈法が手際よく纏められるようになった。

網要書のうちでも、アーパデーヴァ（Āpadeva 十七世紀）の著作 *Mīmāṃsānyāyaprakāśa*（略号MNP）は、クマリーラ系統のミーマーンサー学派によるヴェーダ聖典解釈法を纏めた最も代表的な網要書であり、バースカラ（Bhaskara 年代不詳）作の *Arthasamgraha* の内容に平行した、より詳細な解説書である。しかし網要書という性格上、アーパデーヴァは、聖典解釈のために考案されたミーマーンサー学派独自の術語に対して、本書の中で十分な説明を与えていない場合がある。

クマリーラは、聖典解釈を目的とした著作 *Tantravarttika* と *Tupitika* の中で、数多くの術語を駆使しながら、第一 *adhyāya* 第二 *pada* 以降のミーマーンサー・スートラ及びシャバラ註を、詳細に、かなり冗長に註釈しているが、アーパデーヴァは、クマリーラが術語に帰せた諸機能を暗黙裡に前提した上で、その術語を用いて聖典解釈の規範を

示してみせるのである。本稿では、このような術語の一例として、*vinīyogavidhi* 解釈のための解釈根拠（*pramāṇa*）の一つである *linga* について、*Tantravarttika*（略号TV）を参照しつつ、アーパデーヴァが暗黙裡に前提しているその機能を探り、併せてミーマーンサー学派の言語観が、煩瑣な聖典解釈法をどのように支えているのか、その一端を考察してみたい。⁽¹⁾

vinīyogavidhi とは、ヴェーダ祭式の中で用いられる要素が他のどの要素のために用いられるのか、という適用関係（*vinīyoga*）を規定した、ヴェーダ聖典中の命令文（*vidhi*）である。例えば、“*dadhma juhōti*” という *vinīyogavidhi* は、凝乳（*dadhi*）が献供（*homa*）のために用いられ、献供に従属するもの（*aṅga*）であることを規定している。⁽²⁾

ミーマーンサー学派は、*vinīyogavidhi* の規定する適用関係を決定するための解釈根拠として、*śruti*（明言）、*linga*（徴証）、*vākya*（文内文脈）*prakaraṇa*（章内文脈）、*sthāna*（位置）、*sanakhyā*（原意語）という六種を認めている。⁽³⁾ これらはいずれも、適用関係の規定にかかわるヴェーダ聖典本文の様々な構成要素、即ち単語、文章などのもつ何ら

かの言語機能である。“*dadhma juhoti*”の場合には、“*dadhma*”の具格語尾が、凝乳が献供のための手段であることを知らしめており、六種の解釈根拠のうちの *śruti* に該当する。理由は後で述べるが、*śruti* は六種の解釈根拠のうちで最も有力なものである。同一の *vinīyogavidhi* の解釈に *śruti* のみならず他の解釈根拠も採用可能であり、適用関係の解釈を幾通りにも導き出せる場合には、*śruti* に依拠した解釈が最優先される。本稿で主題とする *linga* は、*śruti* に次いで二番目に有力な根拠解釈である。

ところで、これまでの研究者は、*linga* の機能をどのように理解して来たのだろうか。*linga* の機能を考察する前に、まず主な研究者による訳語に一瞥を加えたい。A.B. Keith は ‘*śruti* と *linga* との各々に’ “express declaration” “indirect implication” という訳語をあてている。⁽⁴⁾ また Gangāntha Jha は ‘各々を’ “direct assertion” “indirect indication” と訳している。⁽⁵⁾ 適用関係を *śruti* は直接的に表し、*linga* は間接的に表す、ということであろうか。確かに “*linga*” という語は、推論式に於ける理由 (*hetu*) と同義に用いられることからわかるように、それ自身のあり

かたを示すと共に、何か或る他のもののありかたをも付随的に示す徴証 (*mark, sign, token*) を意味する。しかしながら、Keith も Jha も ‘*linga* がそれ自身ではどのようなありかたをしているのか、また *linga* がいかにして間接的に適用関係を表すのかについては、何も語っていない。これに対し、*Arthasaṃgraha* に詳細な訳註を付して出版した A.B. Gajendragadkar と R.D. Karmarkar は ‘*linga* を *abhidha* (直接表示能力) と同一視している’。

“*Linga* is defined as the power of words to denote something. Power is nothing but convention. So the pramāṇa *linga* consists in the conventional meaning of a word, the meaning which is expressed by *abhidha*.”⁽⁶⁾

Arthasaṃgraha では ‘*linga* が語源の意味から区別された、語の慣用的意味を表示する能力 (*rādhi*) であることは明記されている。⁽⁷⁾ しかし、それが *abhidha* である、とは述べられていない。*Mīmāṃsānyāyaprakāśa* にもその記載はない。また、Gajendragadkar と R.D. Karmarkar は、

クマールラの著作の中から、その典拠を引用しているわけでもない。*linga* を *abhidha* と同一視する解釈には、どれほどの根拠があるのだろうか。また *linga* は、ヴェーダ聖典中のどのような種類の文に対して、何故に、適用関係を決定するための解釈根拠となるのだろうか。

1. *linga*-*mantra*

linga の機能を論ずる一節の冒頭で、アーパデーヴァは、また *linga* を「能力」(*samarthya*) と等置し、⁽⁸⁾ 例として、

mantra (1) : *barhiṣ devasadanam dami*. 「神の座たる *barhiṣ* 草を〔我は〕刈る。」

が、草刈り (*lavana*) という行為を明らかに示す能力をもつことによって、草刈りに従属するものとなる、と述べた後に、*linga* を「一般的関係を知らしめる他の解釈根拠」(*sāmyasambandhabodhakapramāṇāntara*) に依存するもの⁽⁹⁾と、それに依存しないもの⁽¹⁰⁾(*b*)との二種に分類している。ここで言う「一般的関係」及びそれを「知らしめる解釈

根拠」については、本稿四で論ずることとし、今は触れない。二種の *linga* のうちの (*a*) は、上記の如き *mantra* (真言) がもつ或る種の能力であり、その *mantra* がどの祭式構成要素のために用いられるのかを、それに依拠して知ることが出来るものである。⁽¹⁰⁾

一方 (*b*) は、*A* がなければ *B* が決して実現しないという関係にある *A* と *B* のうち、*A* が *B* に従属するものであることを知らしめる、*A* に備わった能力である。例えば、人は行為の目的を理解した上でなければ、その行為を実行しないから、「目的の理解」(*A*) は、自身が「行為の実行」(*B*) に従属することを知らしめるのである。⁽¹¹⁾

しかしながらクマールラは、この二種のうちの (*b*) の如きものを、*vinīyogavidhi* の解釈根拠として認めていない。MS 全十二 *adhyāya* のうち、適用関係を論ずるのは、第二 *adhyāya* であり、*linga* を扱うのはそのうちの第二 *pāda* であるが、そこで論ぜられているのは、(*a*) の如き *mantra* の適用関係のみである。冒頭の MS 3-2-1 には

「諸々の *mantra* には、意味表示の能力に基いて、従

属関係がある。……」⁽¹⁴⁾

とあり、シャバラは、この pada のどの sūtra への註釈にも、実例として mantra を引用している。そしてクマールは、

「linga とは、諸々の mantra のもつ、意味を理解せしめる能力である。」⁽¹⁵⁾

と明言しているのである。

すると、アーパデーヴァが linga を (a) と (b) の二種に分けたのも、A が B に従属することを知らしめる、A に備わった徴証能力としての広義の linga に二種あることを示したに過ぎず、ヴェーダ聖典が規定する適用関係の解釈根拠としての狭義の linga に二種あると言っているわけではないであろう。適用関係の解釈根拠としての linga とは、mantra がどの祭式構成要素に従属するかを理解せしめる、mantra 自身に備わった能力である、とまずは言えるだろう。

1- linga-vidhātṛi śruti

それでは、linga とは mantra がもつどのような能力なのだろうか。また何故、諸々の祭式構成要素のうち、特に mantra の適用関係を解釈するために linga が依拠されるのだろうか。第一の解釈根拠である śruti と対比しつつ、考察したい。

アーパデーヴァによれば、śruti とは、広義には、或る言葉が他の言葉に依存せずに自らの意味を表示することであり、⁽¹⁶⁾ vidhātṛi (命令表示)・abhidhātṛi (直接表示)・vinīyok-
tri (適用関係表示) の三種がある。vidhātṛi śruti は、願望法語尾 (lī) などの、話し手の命令意志 (sambhavana) を表示して、聴き手に命ぜられた行為への意欲 (arthi bhavana) を惹き起す動詞活用語尾によるものである。⁽¹⁷⁾ abhidhātṛi śruti は、物体ないし行為を表示する名詞や動詞の語幹によるものである。⁽¹⁸⁾ そして、vinīyoktri śruti とは、聴き手がそれを聞いただけで適用関係が理解されるところのものである。⁽¹⁹⁾ 格語尾 (vibhakti) 正確には、動詞に支配される格語尾 (karakavibhakti) は、これの一種であり、⁽²⁰⁾ 適用関係解釈のた

めの狭義の śruti となる。今後本稿では、単独の “śruti” を、狭義に、格語尾による vinīyoktri śruti の意味で用いることにする。

この広義の śruti の三分類法は、TV の次の一節に基づいていると思われる。

「abhidhātṛi と vinīyoktri 一種の śruti がある。同じく vinīyoktri と vinīyoktri 別の [śruti] がある。また、[行為の] 実行がそれに基づく vinīyoktri の vidhātṛi は、第三の [śruti] と言われる。」⁽²¹⁾

「語幹と語尾の śruti は、各々の意味を直接表示するもの (abhidhātṛi) である。単語のもつ、動詞に支配される格語尾は、適用せしめるもの (vinīyoktri) である。しかるに、願望法語尾・命令法語尾・動詞的形容詞の接辞・接続法語尾には、命令 (vidhi) の能力がある。これらのうち、行為を遂行する時には、人は vidhiśruti に依拠する。」⁽²²⁾

また、別の偈の中では、クマールは abhidhātṛi śruti を ukti と言い換えているが、⁽²³⁾ linga をその ukti の能力であると認めていることに注目されたい。

「言葉のもつ ukti の能力が linga である。śruti は、vidhi と ukti と vinīyoga の三種である。vākya は既に示された。」⁽²³⁾

それ故、linga とは、abhidhātṛi śruti の表示能力であると言えることになる。⁽²⁴⁾

ヴェーダの命令文 (vidhi) に於ては、行為を命ずる動詞語尾により vidhātṛi śruti が、動詞語幹と名詞語幹により abhidhātṛi śruti が、そして動詞に支配された名詞の格語尾により vinīyoktri śruti が成立している。⁽²⁵⁾ この vinīyoktri śruti の聴取によって、格語尾が付された名詞語幹が表示する意味対象が何に対していかなる適用関係を成すか、が直接に理解されることになる。

これに対して mantra は、vidhi が命ずる行為を執行する最中に唱えることによって、その行為の執行に関連した

する。」

の中の語“aindyā”が言及しているインドラ神讃歌は、

・ mantra(2) : kadacana starir asi nendra

sāscasi dāsuse.

「インドラよ、〔汝は〕いかなる時にも不妊の牛に非ず。
敬虔なる者に親しみ給う。」

であると思われる。viniyogavidhi(1)は、二つの名詞格語尾によって、このインドラ神讃歌がガールハバティヤ祭火のために適用される、という適用関係を表示しているが、mantra(2)そのものは、それ自身の適用関係を表示していない。クマーリラは両者の表示能力の違いを次のように述べている。

「“kadacana starir asi”と“sāscasi”〔S mantra(2)〕に於ては、語“indra”によってインドラ神が直接表示されている (abhidhīyate) にしても、適用関係は表示されていないのだから、[viniyoktri] sruti は機能していない。何故な

しかし mantra を構成する語がもつ abhidhātī sruti は、viniyogavidhi に於ける viniyoktri sruti の場合と異なっており、適用関係を聴き手に直接に理解せしめるわけではない。例へば、Agnicayana 祭に帰属する vidhi の一つである、

viniyogavidhi(1) : aindryā garhapatyam upatiśhate. (28)

「インドラ神讃歌を以て、ガールハバティヤ祭火を礼拝

らば、こ〔S mantra(2)〕におけるこの語を聴取しても、インドラ神が主要なものであり、mantra が従属するものである、ということとは理解されないから。例えば他方 (即ち viniyogavidhi(1)) で、[“garhapatyam”の] 対格語尾の聴取により、ガールハバティヤ祭火が最も望まれたものであること及び、“aindyā”の具格語尾の聴取によって、インドラ神讃歌が手段であることが〔理解される〕ようには、〔理解されない。〕」

mantra(2)は、インドラ神に呼びかけ、インドラ神の慈悲深い本性 (svarūpa) を明らかにしているが、それだけで、この mantra はインドラ神の礼拝のために唱えられ、インドラ神に従属する。」と確定したわけではない。(29)

しかしクマーリラは、mantra のもつ直接表示 (abhidhāna) の能力に基づいて、mantra には、適用関係を結ぶための適合性 (yogyatā) だけはある、とも認めている。(30) すると、mantra の abhidhātī sruti の能力により表示されている対象に対してその mantra が従属すると確定するためには、他に何が必要なのだろうか。

III. līṅga による適用関係の解釈過程

アーパデーヴァは、sruti による適用関係の解釈を、līṅga などの他の解釈根拠による解釈より優先すべきことを論ずる中で、いかにして līṅga による適用関係の解釈が成立するかについて、若干の示唆を与えている。

「この sruti は līṅga などよりも有力な解釈根拠である。何故ならば、līṅga などの場合には、適用関係を規定する言葉 (vinijakāḥ śabdah) は、直接知覚されるものではなく、想定されるべきものであるから。」(31)

或る mantra が、その中の語の abhidhātī sruti の能力により表示されている対象に従属している、と解釈するためには、mantra 本文とは別に、そういう適用関係を規定した何らかの言葉がヴェーダの中に存しなければならぬ。しかし、好都合な viniyogavidhi がヴェーダの中に現存しなかったり、viniyogavidhi(1)と mantra(2)の場合のように、sruti による解釈が、līṅga による解釈に反する場合には、

linga による解釈を裏付ける言葉を、別に新たに想定しなければならぬ。

しかしアーバデーヴァは、この直接知覚されない言葉をいかにして想定すべきかを具体的には語らず、viniyogavidhi(1)を実例として、インドラ神讃歌をインドラ神のために用いると解する linga による解釈は、ガールハパティヤ祭火のために用いると解する、直接知覚された sruti による解釈よりも、その解釈を裏付ける言葉の想定を必要とする分だけ、手間が一段余計にかかるから、前者より後者を優先すべきである、と説くのみである。⁽³²⁾

しかしクマリーラは、sruti 以外の解釈根拠に依拠して適用関係を決定する時には、必ず適切な sruti を想定し、その sruti によって解釈を裏付けなければならない、と述べている。

「もしも、sruti と同様に、linga など自力で解釈根拠となったならば、このこと(即ち六種の解釈根拠に優先順位のないこと)が成立しただろう。しかしそれら(linga など)は、聖伝書⁽³³⁾と同様に、sruti の想定という方法に

よって解釈根拠となるのである。何故ならば、ここでは sruti のみが唯一の「独立の」解釈根拠であるから。」⁽³⁴⁾

更にクマリーラは、linga 等の sruti 以外の解釈根拠による適用関係の解釈を裏付ける sruti は、arthapati によって想定される、と明記している。

「その〔六種の解釈根拠の〕うち、直接知覚により把捉された字句が適用関係を規定している場合、その〔字句〕は、聴覚において機能しているので、sruti といわれる。しかるに、適用関係を規定していない字句を直接知覚によって把捉した上で、適用関係を規定している〔字句〕が、arthapati によって想定される場合に、linga などが「解釈根拠」となるのである。」⁽³⁵⁾

arthapati とは、A と B の間に、「A は B に依存してのみ成立し、B なしには成立しない。」という方向性をもつ条件関係 (anyathanupatti) が確立しており、しかも A の成立が既に何らかの知識手段によって確認されている場合

に、A の成立に基づいて、未だ確認されていない B の存在を要請する知識手段 (pramāṇa) である。⁽³⁶⁾

mantra(2) の linga による適用関係の解釈は、次のような過程を経て完了する。

mantra(2) を聴取すれば、その中の語 “indra” のもつ linga 即ち abhidhātṛ sruti の能力により直接表示されたインドラ神が直ちに想起される。しかし、想起されたインドラ神への礼拝のためにこの mantra は用いられるのだ、という解釈が成り立つためには、インドラ神が対格で表された、

viniyogavidhi (1) : aindryendram upatiṣṭhate.

がなければならぬ。この vidhi がなければ、mantra(2) がインドラ神を直接表示しつつ、ヴェーダのこの章内に伝承されているはずはなく、ヴェーダ聖典の無謬性が損われるからである。このように、viniyogavidhi(1) は、viniyogavidhi(1) のように現存のヴェーダ中に見出されなくとも、mantra(2) がインドラ神を想起せしめることに基づいて

て、arthapati によってその存在が想定される。そして

viniyogavidhi(1) における “aindrya” の具格語尾と “indram” の対格語尾による viniyokṛtī sruti に依拠して、mantra(2) がインドラ神への礼拝のために用いられる、という解釈が成立するのである。⁽³⁷⁾

ところが mantra(2) の場合には、viniyogavidhi(1) がなくとも、現存する viniyogavidhi(1) の sruti による解釈に相応するように、mantra(2) がガールハパティヤ祭火を表しているのと解すれば、mantra(2) がこの章内に伝承されていることは成り立つから、前記の arthapati は成り立たず、linga による mantra(2) の解釈は斥けられ、現存する viniyogavidhi の想定と手間を要しない sruti による解釈のみが確定するのである。⁽³⁸⁾

iv. prakaraṇa 26 linga の制約

本稿一の初めに紹介しておいたように、アーバデーヴァは、mantra の適用関係を linga によって解釈するために、一般的関係を知らしめる他の解釈根拠が必要であると述べていた。次に、この「一般的関係」とは何のことと

あり、また、linga によって適用関係を解釈する時に、何故一般的関係を理解しなければならないのか、を考えてみたい。

mantra(1)は、新満月祭の祭壇を作るためにクシャ草の刈り取りを行う時に唱えられるものであるが、クシャ草を刈り取るという行為は、何もこの mantra を唱えずとも行うことが出来る。しかしアーパデーヴァによれば、新満月祭の最中に行うクシャ草の刈り取りは、他の日常的な場面での刈り取りとは異なっており、新満月祭の apūrva (祭式執行の果報をもたらす新得力)を完成するための手段なのであり、mantra(1)の朗唱は、クシャ草の刈り取りを、新満月祭の apūrva 完成手段として思い起させる働きをするのである。⁽⁴⁰⁾ところが、mantra(2)の直接表示能力即ち linga は、単にクシャ草の刈り取りを思い出させるのみであり、特に新満月祭の apūrva 達成手段となる草刈りだけを知らしめているわけではない。そこで、この mantra が表示する対象を、この特殊な状況での草刈りへと限定するために、この mantra がヴェーダの新満月祭の章内で伝承されているという文脈、即ち適用関係解釈のための根拠の一つである

prakaraṇa (章内文脈)によって、あらかじめ linga の機能を制約しておく必要があるのである。

「また、そうであること（即ちクシャ草の刈り取りが apūrva の完成手段であること）は、[mantra(1)の]能力のみによっては理解されない。[mantra(1)には]草刈りを明らかに示すことのみを「表示する」能力があるのだから。それ故、必ずや、prakaraṇa など⁽⁴¹⁾が、一般的関係を知らしめるものとして得られねばならない。」⁽⁴²⁾

こうして、「mantra(1)は、新満月祭に帰属する何らかの行為を表示している。」と、当該の行為を、どの祭式に帰属するのかという一般的関係のもとに限定した後に、mantra(2)のもつ linga によって、クシャ草の刈り取りが、新満月祭の apūrva 完成手段という限定のもとに理解されるのである。⁽⁴³⁾

しかしながら、アーパデーヴァは、何故、mantra(2)がいかなる限定も受けていない「クシャ草の刈り取り」を表示するのか、という点については、何も説明を加えていない

い。だが、クマールラの所説によれば、その理由は単語の直接表示能力が普遍を表示するものであることに求められるのである。

MS 3-2-21 ~ 24⁴⁴ agneyadhikaraṇa (「アグニ神讃歌の節」と呼ばれ、

viniyogavidhi(2): agneya agnidhram upatishtate.⁽⁴⁴⁾

「アグニ神讃歌を以て、アグニードラ祭官を礼拝する。」

の中の「agneya」が表示するアグニ神讃歌がリグ・ヴェーダ全体のアグニ神讃歌のうち、viniyogavidhi(2)が帰属する Jyotiṣoma 祭に帰属する (prakṛa) ののみである⁽⁴⁵⁾ことを論じている。通常、linga は mantra 本文の語がもつ abhidhātṛ stuti の能力のことであるが、ここでは、viniyogavidhi の中にあって mantra を表示している語のもつ abhidhātṛ stuti の能力が問題となっているのである。

シャバラは、反論者の sūtra 21 に対して、反論者と定説者の応酬より成る長い註釈を書いている。「linga によ

て解釈すれば、この vidhi は、リグ・ヴェーダ中の全てのアグニ神讃歌を朗唱するような礼拝を命じているのである。prakaraṇa による制約は、それと矛盾するのではないか。」という反論者説を予想して、シャバラは、両者が矛盾しないことを主張しているが、クマールラは、このシャバラの主張の意図を次のように解している。

「普遍は個物ごとに完備されているから、[Jyotiṣoma 祭に]帰属する個々（「アグニ神讃歌」のうちにも、[アグニ神讃歌の普遍の]全体が成立しているから、[linga と prakaraṇa との間に]何も矛盾はない、と考えて、[シャバラは]述べたのである。」⁽⁴⁶⁾

ミーマーンサー学派の定説では、「gauḥ」(「牛」)などの単語(語幹部分)の直接の表示対象は、一群の諸個物ではなく、それら一群の個物に共通に、かつそれらのみに、各々の本来的な属性として備わっていて、同種の個物間の同一性の認識と、異種の個物間の差異性の認識の根拠となる、普遍(jāti, akṛti, samāya)である。⁽⁴⁹⁾また、単語が普遍を直

接表示することを、動詞 *abhi-*「*dha* で以て表す」⁽⁵⁰⁾。

linga が、物体や行為を表示する名詞や動詞のもつ *abhidhatri sruiti* の能力であることは既に論じたが、厳密には普通名詞と動詞の語幹部分は、普遍を直接表示するのである。*viniyogavidhi*(2)の中の語「*agneya*」のもつ *linga* は、——クマールラが「アグニ神讃歌性」と名付けこそしていないが、——個々のアグニ神讃歌に共通し、それらの中に備わった普遍を表示している。それ故にこそ、この語で以て、文脈に応じて、ヴェーダの中のどのアグニ神讃歌にも言及することが出来るのである。

しかし、或る特定のアグニ神讃歌のうちにも、この普遍は欠ける所なく備わっているのだから、たとえ *prakaraṇa* によって *linga* を制約し、*viniyogavidhi*(2)が言及しているアグニ神讃歌を *Jyotiṣṭoma* 祭に帰属するものだけに限定しても、語「*agneya*」の *linga* がアグニ神讃歌の普遍を直接表示していることが、否定されてしまうことにはならない。むしろ、*linga* によって、聴き手にこの普遍が理解されれば、聴き手の心には、「この場合、文脈上どのアグニ神讃歌がふさわしいのだろうか。」という、特殊化への期

待が生れてくるのであり、この期待に応えるのが、*prakaraṇa* による制約なのである。

「それ故、*linga* を備えた文は普遍を対象とし、*prakaraṇa* が、それ（即ち普遍）によって期待された特殊を理解させるから、（普遍が個物に）内属することに矛盾はなく、[*prakaraṇa* を] 破るのは正しくない」⁽⁵¹⁾。

アーパデーヴァが、*mantra*(1)の表示能力は単にクシャ草の刈り取りを明らかに示すのみであり、*prakaraṇa* によって、その表示対象を新満月祭の *apūrva* 完成手段となる草刈りのみに限定する必要がある、と述べたのも、「語は普遍を直接表示する。」という、ミーマーンサー学派の言語観を踏まえた上で、*mantra*(1)中の動詞「*dāmi*」の語幹部分は、草刈り一般に共通する普遍を直接表示する、と考えたためであろう。

五、*linga* の第二義的意味

linga の機能を論ずる締めくくりとして、アーパデーヴ

「は、*mantra* のもつ *linga* は、*mantra* をその第一義的意味 (*mukhyārtha*) に於て適用せしめるのであって、第二義的意味 (*gaunārtha*) に於てではない、と断定し⁽⁵²⁾、その理由を次のように述べている。

「第一義的意味は、「語を聴くと」最初に浮んで来るものだから、それ（即ち第一義的意味）のみに於て適用関係の認識が完成したのに、再び第二義的意味に於て適用関係を想定するならば、過重 (*gaurava*) の過失に陥ってしまうからである」⁽⁵³⁾。

それ故、*mantra*(1)のもつ *linga* に依拠すれば、この *mantra* は、語「*barhis*」の第一義的意味であるクシャ草の刈り取りのために適用されるのであり、クシャ草に類似しているため「*barhis*」の第二義的意味となるウラバ草やラージ草の刈り取りのためにまでも適用すべきではないのである」⁽⁵⁴⁾。

しかし、*mantra* をその第一義的意味のために適用する時には、この *linga* による適用関係の解釈が、その

mantra の適用を規定し、かつ現存する *viniyogavidhi* の *sruiti* による解釈と矛盾してはならない。アーパデーヴァはここでこの条件を明示してはいないけれども、既に、*mantra*(2)の適用関係を巡って、*viniyogavidhi*(1)の *sruiti* による解釈を優先させるために、インドドラ神讃歌が、インドラ神ではなくガールハパティヤ祭火の礼拝のために適用されることを認めていた（本稿三）。すると、通常はインドラ神を第一義的に表示している *mantra*(2)が、この場合には、第二義的に、ガールハパティヤ祭火を表示していることになる。

MS 第三 *adhyāya* 第二 *pāda* の第一 *adhikaraṇa* (*sūtra* 1-2) は、*mantra* が原則として第一義的意味を表示することを論じているが、次の第二 *adhikaraṇa* (*sūtra* 3-4) は、その例外規定として、*mantra* が第二義的意味を表示する場合を扱っている⁽⁵⁵⁾。この註釈の中で、クマールラは、*mantra* がその第一義的意味に対して適用されると解釈すれば、*brāhmaṇa* 中の *viniyogavidhi* と矛盾してしまう場合には、その *mantra* は、第一義的意味とは別の第二義的意味に対して適用されることを明記している。

「brāhmaṇa と mantra のいずれかに第二義的意味〔を表示する〕ことがある場合には、そのうちの mantra の方が、〔brāhmaṇa の〕再解説であるから、第二義的意味〔を表示する〕のである、と認められる。⁽⁵⁶⁾」

ミーマーンサー学派によれば、brāhmaṇa を構成している vidhi は、他のいかなる知識手段によっても認識し得ない宗教的義務 (dharma) を規定している。それ故、vidhi の規定を理解するに際しては、vidhi の字義通りの意味を最優先しなければならぬ。一方 mantra は、祭式執行中に唱えられることによって、祭式に関連する事物を想起せしめる働きを果すが、mantra により想起される事物は、いずれかの vidhi により規定されているものであり、mantra はその再解説 (anuvāda) であるに過ぎぬ。

「両者のうち、brāhmaṇa は全く未知のものを命ずるものであるから、また〔他の文の機能を必要とせずに〕最初に機能するものであるから、他に何の知識手段ももた

ない事物に関して、第二義的な意味〔を表示する〕ことは不適切である。

しかし mantra は、brāhmaṇa により命ぜられた事物を明らかに示すものであるから、それ（即ち brāhmaṇa）に従属して機能するのであり、それ故、〔mantra は、brāhmaṇa と〕矛盾する自身の第一義的意味を捨てて、第二義的意味の認識原因となるのに適切なのである。⁽⁵⁷⁾」

それ故、mantra は vidhi に従属しているのであり、mantra がその第一義的意味のために適用されると解釈すると、その mantra の適用を規定した viniyogavidhi の śruti による解釈と矛盾してしまう場合には、mantra は、viniyogavidhi に相応しい何らかの対象を第二義的に表示して、そのために適用されることになるのである。

結論

以上の考察によって、アーパデーヴァが、適用関係の解釈のために暗黙裡に前提して使用している linga の機能が明らかになった。次に挙げる諸点を本稿の結論としたい。

に適用される。

註

(1) 本稿で用いた略号及び底本。

MNP : *Mīmāṃsānyāyaprakāśa* (F. Edgerton: *The Mīmāṃsā Nyāya Prakāśa or Apadeś*, New Haven, 1929).

MS : *Mīmāṃsāsūtra*, ŚBh: *Saṅgrahajaya*, TV: *Tantravārttika* (*Mīmāṃsāślokaśāstra*, Ānandāśrama Sanskrit Series vol. 97, part 4, 1972).

TV' : *Tantravārttika* (ibid. part 2, 1981).

ŚV : *Ślokaśāstra* (*Mīmāṃsāślokaśāstra*, Chowkhamba Sanskrit Series No.3, 1898).

AS : *Arthasaṅgraha* (A. B. Gajendragadkar & R.D. Kar-markar: *The Arthasaṅgraha of Laṅkāśi Bhāskara*, Bombay, 1934, reprint Delhi 1984).

(2) MNP p.206, ll.5-6.

(3) ibid. ll. 9-10. linga 以外の五種の解釈根拠の訳語は、北川秀則博士に由来する。「Arthasaṅgraha 和訳解説Ⅱ」〔名古屋大学文学部二十周年記念論集〕1968, pp.69-88, p.76.

(4) A.B. Keith: *The Karmā-Mīmāṃsā*, London 1921, p.89.

(5) Gaṅgadhara Jha: *Purva-Mīmāṃsā in its Sources*, Varanasi 1942, 2nd ed. 1964, p.247.

(6) AS p.125.

(7) ibid. p.16, l.11.

linga (徴証) とは、名詞・動詞の語幹がもつ abhidhatri śruti 即ち直接表示能力 (abhidhā) である。Gajendragadkar と Karmarkar が立てた解釈がクマールラの所説によって立証された。

適用関係の解釈根拠としては、mantra の適用関係をその mantra 本文の字句から確定するために、mantra に含まれた語の linga が依拠される。

mantra の適用関係をそれがもつ linga に依って確定するためには、linga が表示するもののために、その mantra を用いるという趣旨の viniyogavidhi や arthapatti によって想定しなければならない。

linga 即ち直接表示能力が表示する本来の対象は、同類の個物全てに共通する普遍であるから、文脈に応じて対象を適切に限定するために、prakaraṇa (章内文脈) など他の解釈根拠によって linga を制約する必要がある。

mantra は原則として、その linga が第一義的に表示するもののために適用されるが、そうすると mantra の適用を規定した viniyogavidhi と矛盾してしまう場合には、viniyogavidhi に相応しく第二義的に表示するもののため

- (anumāna) と、そのうち、その權威が認められる。
 (MS 1-3-3)
- (34) yadi śrutivāḥ līngād mān āpi svatantrānam pramānyam
 abhaviṣyāt tata etad upapatsyata teṣāmitu smritiāc chruṭy
 anumānadatvam pramānyam. śrutiṛ eva hy atraikam
 pramānam.(TV p.229,11.17-18)
- (35) tatra prakṛtyasegghitani yany aksarāni viniyuñjate sa
 śrotarvittivāt śrutiṛ ity ucyate. yatra tv aviniyojakāny
 aksarāni prakṛtaksena gṛhitvā viniyojakāny arthāpatya kal-
 pyante tatra līngādhi bhavanti. (ibid. p.229, 1.21-p.230,1.3)
- (36) ŚV Arthāpati k.1.
- (37) TV p.230,11.4-6.
- (38) ibid.11.6-9. ㄱㄴ Gajendragadkar ᆞ Karmakar ㄱㄴ
 līnga ㄱㄴ의適用關係を解釋するために、śruti の想定
 (śrutilalpna) が必要であることを説いているが、TV
 ㄱㄴの他のテキストの参照箇所は、一切示されていない
 (AS p.127)。
- (39) *Maitrayājai Samhitā* 1-1-2, cf. MNP p.211, Note 88.
- (40) MNP p. 211,11.12-15.
- (41) prakaraṇa の他じふ、アーベテーサハ、samakhyā (原
 義語) ㄱㄴ의 postnamentprandmantra のみ、līnga の制約
 を認めている (MNP p.211,1.27-p.213 1.9)。この論議は
 MS 3-2-2 に扱われている。またMS 3-2-20 ㄱㄴ krama (順
 序) MNP の sthana (位置) に相対する) ᆞ samakhyā ㄱㄴ
 ㄱㄴの līnga の制約を論じている。

- (42) tattvam ca na samarthyamatrad avagamya, lavanapra-
kṣaṇamātre samarthyat. ato 'vāśyam prakaraṇādi
samānyasambandhobdhakam svkāryam. (MNP p.211, 11.
15-17)
- (43) ibid. p.211, 11. 18-22.
- (44) *Taittirya Samhita* 3-1-6-1. Gaṅgānātha Jha の抜摘によ
る (Śabara-Bhāṣya, vol.1, Gaekwad's Oriental Series
No.66,1933, reprint 1973,p.407,1,11)
- (45) クマリーラは、定数者の sūtra 22 への註釈の中で、
「*prakaraṇa* に属する *vinīyogavādin*(3) の規定する行為が
Jyotiṣoma 祭に属するところ一般的関係を理解し、しかる
のちに、この *vinīyogavādin* によつて、アグニ神讃歌によ
るアグニードラ祭官への礼拝という特殊な行為を理解すべ
きである」とする (TV p.165, 11.1-17)。
- (46) ŚBh p.161, 11.1-5.
- (47) 「この礼拝によつて、(朗唱される mantra が) その (即
ちアグニ神讃歌の) *linga* をめいこのとが認められればよ
うのであつて、(リグ・ヴェーダの) 十章全体の個々の「ア
グニ神」讃歌が〔認められねばならないというわけでは〕
ない。そしてこのことは「*Jyotiṣoma* 祭に」帰属する
mantra が用いられれば、残りなく認められたことになる。」
tallīngavatīnenopashānenanugrahitavya na dāśatīyā-
ntravyakīḥ. sā ca prakīte mantra upādīyamāne niravāśeśa
upāta bhavati. (ŚBh p.161, 11.6-8)
- (48) samānyasya prativakti samāptephrakṛtīyām api vyaktāu

- (56) *gaunatvam yatra nāma syāt kvacid brahmanamantravoh/
tātrānūvadārūpatvān mantrāṇān gaunatesyate//*
(TV p.132, ll.12-13)
- (57) *tatra brahmanasyātyantaprāptavāt prathamapravṛttes
cānanyapramāṇake 'rthe gaunatvam evyukam.
mantrasya tu brahmanacoditātpraprakāśānt tatpara-
tantravṛtthē/virodhinaṃ svārtham atyaya mukhyam yukto hi
gaunātthanimita bhavaḥ.* (ibid. p.132, l.16- p.133, l.2)